

道徳教育に役立つ名句・名言——目次

- ① 学の喜びは 己の熟するところにある 8
何のために学ぶかについて考えさせる
- ② 習は 山を移すことである 12
学習の意味をきちんと伝え、それを身につけさせる
- ③ 博学・審問・慎思・明弁・篤行、五者、その一を廃しても学にあらざるなり 16
五つの学びの「もと」から、教育のあり方を考え直す
- ④ 善者をもって人の善心を感じて 情性の正を得さしめる 20
問題点を改めさせて完全を期待する教育から、人間のよさを拡充させる教育へ
- ⑤ 人は 人によりてのみ人となり得る 24
学習者とは何か、教育者とは何か、人となるとは何か
- ⑥ 守・破・離 28
教師の教育力の成長過程

7 教えて導くことの厳ならざるは、師の怠りない 32

張りつめたゆるみのない心で授業に臨ませているか

8 外を制するは 内を養うなり 36

心の教育と行動の教育とは一如のものであると考えて道德教育を行う

9 故きを温ねて 新らしきを知る―その1 40

徳目主義というマイナスの教育的遺産を生かす

10 故きを温ねて 新らしきを知る―その2 44

五段階教授法や相対立する道德教育論のマイナスの教育的遺産を生かす

11 見・視・観・察 48

子どもをみる目の深さによって教育は大きく変わる

12 人に 忍びざるの心あり 52

子どもは人間のよさを持っていると信じて、それを拡充する

13 人間一人を粗末にするとき、教育はその光を失う 56

一人ひとりの子どもと真剣に向きあう

14 教育の究極は教師のタクトの力である 60

教師には臨機応変の教育力が求められる

15 啐啄同時 64

子どもの求める心と教師の指導力とのバランスこそ重要である

16 憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず 68

子どもの憤や悱を盛んにする

17 本立ちて道生ず 72

ねらいの研究、教材研究、子ども研究は授業づくりの「もと」である

18 理を究め 情に居る 76

こくのある芳醇な授業を目指したいものである

19 孟母三遷の教え 80

人間のよさに満ちた教育的環境を整える

20 一陰一陽これ道という 84

相対する二つの教育論のバランスこそ大切である

付 子どもを変えるのは隣の子どもである 88

あとがき 94

学^{がく}の喜びは 己の熟するところにある

何のために学ぶかについて考えさせる

◆何のために学ぶかについて考えさせることの重要性

ある学校の校長先生が朝礼で、何のために学校で学ぶかに関して、各自考えるようにという課題を出されたという。さらに、考えるヒントとして、「お父さんやお母さんや先生にほめて欲しいから」「将来のために」「知的好奇心」の三つの選択肢を示されたという。

「何のために学校で学ぶか」について、子どもに問いかけて考えさせることは極めて重要なことである。学校での学びは、子どもの生活の中心であるが、その中心であるものの目的は何かを把握しないまま、何となく学校で学んでいる子どもがほとんどではないかと思っているからである。

目的を持たない学びは、主体的な学びにはならないし、場合によれば、他者から強要された苦痛になりかねないからである。また、子ども達が考えやすいように三つの選択肢を示して課題を出したことも素晴らしい。

ここで私が問題にしたいのは、選択肢として示された三つの内容である。

「お父さんやお母さんや先生にほめて欲しいから」とする目的意識は、学びの主体は自分にあるという学びの本質からみれば他律的であるともいえる。しかし、低学年の場合は、このような目的意識が刺激となって子どもの学びを促進することがあり、一方的に否定することはできない。この目的意識が土壌になって本格的な学びへと高まっていくことが期待されるからである。

「将来のために」という目的意識は、子どもに将来がみえるのかという意味を含めて漠然としており、とらえようがない。「将来のために」は、どんな将来かが具体的にみえない。もしそれが、よい大学に入る、よい会社に入るという進学の意味したものであるとすれば、学びの本質からみて疑問がある。しかし、前者と同様に本格的な学びの土壌になるという意味で一概に否定できない。それを真の学ぶ目的に向かってどう結びつけていくかは、子どもの発達を踏まえた指導が待たれるところである。

最後は、「知的好奇心」を満たすという目的意識である。知的好奇心は、自分の不完全性を自覚し高みに向かって求めて学ぶという学びの本質からみて一応納得できるが、疑問もある。

◆学ぶ目的は、人間として熟していくことではないか

ここで、標題の「学ぶ喜びは、己が熟するところにある」について考えてみよう。これは、『論語』にみえる朱子の言葉である。この句は、先の校長先生が示された「何のために学校で学ぶか」という課題に対する一つの考え方として充分考えられるが、校長先生が示された三つの選択肢の中にはないように思われる。

この句の「己が熟する」がキーワードであろう。何をもって己が熟するかと考えるかであるが、その本意は、自分が人間として熟していくことではないだろうか。

国語や算数を基幹教科であるとする研究会がある。基幹とは、何かの体系の中心になることをいうが、国語や算数は教育という体系の中心であるといえようか。進学のための基幹であるとするなら理解できないことはないが、教育の基幹ということになれば、それは人間づくりでなければならぬ。国語や算数を通して人間になっていくことが学びの目的ではないかと思うのである。知的好奇心から生まれた単なる物知りでは困るし、立身出世だけでも困る。

大江健三郎氏が「なぜ、子供は学校に行かねばならないか」について書いた文がある。ご子息光君が小学生の頃について書いた文である。「光にとって、音楽が、自分の心の中にある深く豊かなものを確かめ、他の人に伝え、自分が社会につながっていくための、一番役に立つものです。（中

略）国語だけでなく理科も算数も体操も、自分をしっかり理解し、他の人とながっていくためのものです」と述べている。

「自分をしっかり理解し、他の人とながっていくためのもの」のように、人間として熟していくことこそ教育の目的ではないだろうか。このことは、教育基本法の教育の目的に「人格の完成」を掲げていることでも明白である。

したがって、校長先生が示された選択肢は、人づくりという教育の最終目的を目指して、発達段階に応じて段階的に指導する必要があるうし、このように学びの目的を構造的段階的にとらえて教育する必要がある。校長先生の問いかけを、担任の教師がどのように理解して、担任する学級の子ども達の発達段階を踏まえて、どのように具体化していくかが重要である。

そのためには、道徳の時間はもちろん、朝の活動、総合的な学習の時間等で、学びの目的について話し合わせたり、教師の考えを示して子どもに問いかけていきたいものである。



もと 本立ちて道生ず

ねらいの研究、教材研究、子ども研究は授業づくりの「もと」である

◆「本立ちて道生ず」について

この言葉は、『論語』の学而第一にみえる言葉である。本文は、「君子、本を務む。本立ちて道生ず」となっている。ここでのいう君子とは何か。「君子とは、完成された聖人と異なり、自分の不完全性を自覚してよく生きたいと求めている者をいう」（『儒家の道徳論』千徳廣史・ぺりかん社）。したがって、子ども教師も君子であるといえるし、お互いに君子でありたいものである。

その君子は、何を求め続けるかといえば、「もと」を求め続けるというわけである。何故ならば、「もと」をしっかりと確立していれば、道は自然に生まれるからである。

教育における「もと」や「道」は何か。

◆「もと」と「道のねらい」の研究

第一の「もと」は、「この授業を通してどんな子どもを育てるか」について考え悩むことである。「この授業を通してどんな子どもを育てるか」という「もと」が確立されていれば、「この授業をどう展開するか」という「道」は自然に生まれると考えられるからである。

「この授業を通してどんな子どもを育てるか」に当たるものは、授業のねらいである。

授業のねらいは、まず、そのねらいがどのような人間の形成に連動しているかという大局的な目的観が大切である。次は、ねらいを具体的に捉えることが大切である。道徳教育の場合は、この授業を通してどのような道徳的心情を育てるか、どのような道徳的理解を深めるか、どのような道徳的実践意欲を期待するか、どのような道徳的行動を期待するかと、ねらいを具体的に把握することである。それは、ねらいを人間のよさから考え、それを自分の言葉で具体的に書く作業でもある。

◆「もと」と「道のねらい」の教材研究

第二の「もと」は、教材研究（道徳の教科化以前は、資料の読みといていた）である。教材研究のひとつである資料の読みは、一般的にはひとつの内容項目から読む傾向が強いが、教師という

立場を離れて、「一人の人間としてこの資料から何を学ぶか」というように、人間のよさを求める者の一人として、内容と内容とを関係付けて読んだり、よい行為とその行為を生むものというように層的に読むことが大切であろう。内容の層的構造的な考え方については、40頁の「故きを温ためて新しきを知る―その1」で詳述しているので、ここでは省略する。

◆「もと」とつづの子ども研究

第三の「もと」は、子ども研究である。子ども研究の一つである実態把握の場合、子どもの問題点をとらえるのが一般的であるが、これでは、子どもを病人扱いにしかねない。子どもの可能性に着目して、それを伸ばし育てる教育でありたいと思う。また、子どもの学習能力や学級の雰囲気への把握も大切である。子どもの研究の重要性は、48頁の「見・視・観・察」で詳述している。

◆教育方法にとらわれて、「もと立たずして道に迷う」であってはならない

このようにして「もと」が明らかになれば、指導過程・教材の選定・発問・反応の受け止め方・板書等々の道（方法）は、自然に生まれるものである。

これらの方法は、目標や内容・教材・子どもの発達段階や学級の雰囲気等々の諸々の条件、つまり授業の「もと」によって異なる。したがって「もと」をしっかりと確立していなければ、授業を成

立させる条件に即応した教育の方法を生み出すことはできないということになる。

私が東京教育大学（現筑波大学）附属小学校に勤務していた頃の先輩は、「道徳教育における問題解決学習は、目的か方法か」「徳目とは何か。それと君の生活とはどのように関係しているか」「今日の君の授業は、どのような人間教育に結びついているか」と問い質してくれた。これらの先輩達は、常に「もと」を求め続けている人々であり、だからこそ尊敬できたとし、苦言を謙虚に受け止めることができたのである。

このような立場から道徳教育の現状を見ると、「どう展開するか」という方法を追い求め過ぎているように思われる。道徳教育、特に道徳の授業に関して、多くの禁止事項があるやに聞くが、そのほとんどは方法論である。これでは、「本立てずして、道に迷う」ことになる。

「もと」を求める際、もう一つ大切なことがある。それは学校教育は公教育であるから、教師の独善は許されないことである。そこで学習指導要領の精神をよく理解し、それを踏まえて、「もと」について悩み苦しまなければならないのである。それは「もと」に関して自分という人間を重ねて考えることであり、「教師よ。哲学せよ」といってよからう。